飢える故郷

井上光晴

未來社刊

飢える故郷

一九六一年五月一五日　第一刷発行

定価　三二〇円

著者　井上光晴

発行者　西谷能雄
東京・文京・表町

発行所　株式会社　未来社
東京都文京区表町七八番地
電話(九二二)六六六(九代表)〇四五四
振替東京八七三八五番

検印廃止

乱丁・落丁本はおとりかえします。
(ふじ活版・萩原印刷・富士製本)

目次

完全な堕落
手の家 37
褐色の唾 73
飢える故郷 131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

飢える故郷

完全な堕落

相沢さん外泊許可がでてよかったですね、といいながら橋爪看護婦が自分の背後にある長いコンクリートの廊下を遮断するような手つきで鉄の格子戸を閉めた。ほんとにいろいろお世話になって……お世話になりましたと言葉の先を折るような口調で相沢博明の妻の夏枝が礼をくり返した。本当によかったですね、外泊許可がでて、相沢さんうれしいでしょうと橋爪看護婦がその夏枝の頭ごしに相沢博明に向って声をかけそれからまた、明日は三時までには帰ってきて下さいよ。わかっていますね、とつづけた。

「ぎいー、ぎいー、がたーんか」と相沢博明がいった。

「悪いわよ、何か返事しなくちゃ」小走りで彼のあとを追いながら相沢夏枝がいった。

「誰に」依然として前の方をみつめたまま博明がいった。

「看護婦さんよ。……折角親切にいって下さっているのに」と夏枝がいった。

「本当に刑務所みたいな扉だからな。……刑務所には行ったことがないけどね、あのぎいー、がたーん、という音をきくとぞっとするね、精神病院だから無理もないかもしれないけどね」ね、ね、という語尾を一つ一つ区切るようにして博明が別のことをいった。

「バスに乗りますか、車の方がいいかもしれないけど……病院からよんでもらいましょうか」と夏枝がいった。

「バスでいこうよ、もったいないからね、おれのことは心配いらんよ、もう体はすっかりよくなったんだからね」と博明がこたえた。

病院のすぐ前のバス停留所に立っている二人づれの中年の女が、この病院をたずねはしたが自分の家族とか親類とかとは何の関係もないのだというような眼で、少し右足をひきずりながら歩いていく相沢博明をみつめ、その好奇心にみちた無遠慮な視線をはらいのけるように、「あついわね、二月だというのにね」と夏枝がいった。

「あついのか寒いのかわからんけど妙な天気だね」そう返事をして、彼はくすんだ薄い灰色の雲の中から隈を作ったような光を海に放っている夕刻間近の太陽を見上げた。

「斉木の奥さんすっかりおふとりになってね……」と白いウールの半コートを着た背の低い女がわざとらしく横をむいて話しかけ、「そうね、あたしもいまそう考えていたところ」と、玉虫色の長いコートを着た女が、これもまたとってつけたようなうけこたえをした。「ひどくはしゃいでおられたけど、本当は迷惑なんじゃなかったのかしら」「迷惑なんてそんな、会社じゃ誰でもしってることでしょう。それに本当にうれしそうだったじゃないの」「そうかしら……それでもこんなとき、社宅は損ね、全部皆にわかってしまうんですもんね」

「恭三さんのね、大学からずっと一緒だったというお友達が十日ばかり前にたずねてこられたのよ」といいかけ、あっというような眼をあげて夏枝が博明をみた。停留所の女たちの甲高

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い声から彼をまもろうとしてとっさに思いついた言葉だったのだが、声にだしてしまってから、義弟のことに触れるのもタブーだったのだと気づいたからである。

「そう」夏枝がほっとするほど博明は無関心な返事をした。

「オーバア脱いだら、あついから」と夏枝が前の言葉を取消すようにいった。

「いいよ、おれはそうあつくもないから、心配しなくてもいいよ」と博明がいった。その時また白いコートを着た女の彼を見る視線と夏枝の視線が出会い、「バスおそいわね、十五分もうとっくにすぎてるのに」とその女が腕時計をはめた短い腕をまくりあげた。

「バスきたらしいわ」といって背の高い方の女がふふふと笑った。「いってみることね」まくった袖口を下しながら、その笑いにのって腕時計をした女のたてた笑い声が夏枝にはいやらしくひびいた。

「港行きです、お早くねがいます」自動車のドアをあけた車掌がゴムマリのような声をだした。なるべく停留所の女たちと離れて坐るようにした後方の席で、その若いはちきれるようなズボンをはいた車掌に切符の代金を夏枝が渡そうとした時、不意に「恭三の友達がたずねてきたのか、なんといってきたんだ」と博明がいった。

「どんな話か、兄さんが話しておられたからわからないけど……」と夏枝がぎくっとした声を立てて車掌から切符を受取った。

「ふーん」と博明がうなずき、しばらくしてから低い弁解するような口調で「恭三が自殺したのはおれが病院に入る前だったかな、入ってからだったかな、どうもはっきりしなくて、な

んだけど……」といった。
「入る前よ」と夏枝はこたえた。
「そうだったかな、おれが入る前か……」
「そうよ」と夏枝がいった。
「そうだったかなあ」と博明がひどく弱々しい声をだして、考えこむように瞼をとじその上を指でおさえた。
右手の親指と中指を橋を渡すような恰好にして瞼の上から眼球をおさえる、疲れた時にきまってやるくせになったその彼のしぐさをみながら、夏枝は「きれいよ、海」と半分咽喉にかかった声でいった。殆ど毎夜襲ってくる重い息と息とをつないだような時間が不意に濃い藍色に染った海面を逆流し、その流れていく時間の向うに、黄色いカンバスの上に黒い絵具のあぶくを溶きまぜたような濁った一つの場景が傾く。
夏枝、おかしいよ、苦しいよ、どうにもならないんだ、ずうっと死体が並んでいてそれがはねのけられないんだ、と喚く博明の腕にぶすりと催眠薬の入った注射針がつきささる。夏枝おかしいんだ、どうにも仕方がないからあついから逃げるんだ、と泣きだす博明の静脈を浮きださせながら、うちには遺伝的な因子は何もないはずだがね、それとも親父こいつを作る時、何かしくじったかなと他人の患者に対するような口をきく隆之の持つ注射針に吸込まれる液体が、ひどく不潔な、唾液のようなぬらりとした色を放つ。恭三は恭三で馬鹿みたいな真似ばっかりしやがるし、どうしてこう相沢一族は深刻なことが好きなのかな、ね、夏枝さんそう思い

ませんか、という隆之の持つ注射針の尖端がコブのできた博明の血管をぐいぐいと抉っていく。こいつ死体とか、おれが悪かったとか、わけのわからんことばかりいうけど、軍医時代に何かやったんじゃないか、夏枝さん前に何かそんなこといっていませんでしたか、という女の眉をつけたような隆之の青白い顔が時々ぐっとつきだすように迫ってくる。そしてそん時にきまって、あなたどこにいるんですか、という嫂桂子の鼻にかかった声が診察室につづく廊下のあたりからきこえてくるのだ。

「やっぱり恭三が自殺したのは、おれが病院に入る前だったかなあ」という博明の声がふっと夏枝の耳の奥に自分が呟くようにとどいた。

「そうよ、恭三さんがなにしたのは一昨年の秋だったから……」といって夏枝があらたに視線をとりもどしたような眼をして博明の方をみた。

「一昨年の秋だとすると、おれが病院に入ったのは去年だったかな」と博明がいった。

「去年、年あけてすぐよ」

「去年か、そうするとまだ一年にしかならんのだなあ、一年にしかならんのによくあの真崎さん外出させてくれたね」

「よくなったからよ、このままの状態で半年もすれば退院できるって……」博明にだけとどくような声で夏枝がいった。

「インシュリン療法がきいたんだなあ」と博明がいい、それからまた言葉をひるがえすように「恭三はどうして自殺したのか、夏枝はしってるか」ときいた。

「その話はあとでしましょう、今日は折角うちへ戻れるんだから、何か楽しい話の方がいいわ」と夏枝がいった。一つ空席をおいてその前に坐っている肩の張ったレインコートをきた男がちょっとふりむき、つれのひどく派手なネッカチーフを頭からかぶった女をつつくようにして何か話しかけた。

「うん」とうなずいたきり、そう不機嫌でもない表情で博明はまた眼をとじたが、夏枝の中にふたたび窓辺を走る海がそのまま腐っていくような時間が揺れはじめる。

恭三が四度目の自殺に成功した時、遺書はなにもなく、日記帳にはただ第一回に睡眠薬を飲んだ時の日附で、「今日あの男に病院で会った。やあ君かと大声をあげ、脚気だといって笑った。この結果はつねに完全な堕落である」と書かれたきりその後には一行も記されていなかった。国家試験も受かったというのに恭三さんももったいないことをしたねえ、とまるで品物でも惜しむような声の蔭で、それはそうとここも大変ねえ、博明さんもあまり加減がよくないというじゃないね、こんどはお葬式にもでられていなかったようだけど、という夏枝のみしらぬ親類の女のささやきがきこえてくる。自殺したりおかしなことになったり、これじゃ娘が大きくなっても嫁にもやれないわね、と小学三年と幼稚園に通う娘を持っている桂子が病院用の広い台所までわざわざきて、働いている夏枝の胸に黒い言葉をつきたてる。

「恭三はなぜなんにもいわないで死んだのかな……」

「それは後で……」

「やっぱり少しくどすぎるね、おれのいうこと」

「そんなことないと思うけど……」
「そうかなあ」
「大丈夫よ、よくなっているのよ、よくなっていなかったら外泊の許可なんかでるはずがないじゃないの」
「うん、それはそうだけど……」
「ほら、海がきれいよ、みてごらんなさい。ぎらぎら光っているわ」

海岸に沿った長い監獄のようなトンネルを通りすぎると、運転台の横に坐っていた小学四年生位の男の子が、「あ、囚人が働いとる、青い服をきて何人もいる、姉ちゃん」と叫んだ。

夏枝の肩ごしに体を乗りだすようにして眺めた博明の眼に護岸工事をしている男たちのひどくのろのろとした手と足が映り、その中の一人が顔をねじまげてバスの方をみるとひきつるような笑いを浮べた。

……北支にもああいう人間がいた。中支の馬鎮という村ではああいう人間が大勢殺された、という思いが彼のどこからかするするとひきだされてきた。すると突然彼の前に、ものすごい火焔をあげて燃え崩れる一つの村落と、壊れた橋のたもとにあった仏堂が映ってきた。その仏堂の白い壁の前に、憎悪と悲鳴とがまじりあったような匂いをこめて流れる煙の間から針金で後手にしばられた中国人の男たちが、何人も何人もひきずられてきたのである。どのような戦陣の間でも毎朝従兵にもみあげを剃らせることを日課とする中隊長が何かひきつったような声

で命令し、それから男たちは三人ずつ一かたまりにされて濁った運河の岸に追いやられた。初年兵集合、という濁った号令が上り、男たちは三人ずつ同胞のみている前で昭和十九年補充兵の手榴弾訓練用の標的に使用されたのである。

「何かいった」と夏枝が博明の方をみた。

「いや、何も、何もいわない。……戦争中のことを考えていたんだけどね、中支のことじゃないんだ。学校のことを考えていたんだけど、おれが医専をでたのは昭和何年だったかなあ」博明が自分の内心を真崎医師からみとがめられたような声で弁解した。戦争中のことを考えてはいけないと、彼はいつも真崎医師からいわれていたのである。

「昭和十八年よ、私が女学校をでた年だからよくおぼえているわ。ちょうど、十年前ね」と夏枝がいった。

「軍医学校をでて、中支にいったろう、それから先はちっともおぼえていない」博明が弁解をつづけた。

「おぼえていなくてもいいじゃないの」と夏枝がいった。

「インシュリン療法をやると、どうしても記憶にぽっかり穴のあいたところができてしまうからね」

「記憶なんか……」どうでもいい、といおうとして夏枝が急に言葉を途切らせた。博明の表情に一瞬苦痛を耐えているという翳が走ったのをみたからである。

「どうかしたの」と夏枝がいった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com